

# 早稲田大学政治学研究科 博士学位論文 概要

2015年3月31日

氏名 三村 憲弘

題 目	党派性の二重構造
-----	----------

## 論文の概要：

党派性は投票行動を最もよく説明する要因であり、重要な政治的態度に対する影響力も大きい。そういうことから、政治意識の中核をなすものとしてさまざまな観点から研究がなされてきた。しかし、このような機能を持つ党派性がいったい何であるのか、どのような概念を用いれば適切に捉えられるのかという点については、政党と有権者の結びつきとしてあいまいな形で概念化されるか或いは各国で独自に展開されてきた世論調査での質問をもとに技術的な問題として議論されるかで、十分な検討が行われてきたようには思われない。本研究は、このような党派性の概念と理論を精緻化することを目的にしている。

党派性の概念に関しては、有権者の党派性を適切に捉えることのできる新たな概念化の試みとして、政党評価と党派アイデンティティという二重構造によって党派性を捉えることを提案し、その妥当性を確認する。まず第1章で、党派性の概念化において実証の対象として最も大きな影響力を持ってきたアメリカと社会調査から独自の展開を経てきた日本を取り上げ、これまでの研究においては日本人の党派性は政党支持態度、アメリカ人の党派性は政党帰属意識という単一の党派性によって捉えられると考えられてきたが、日米の党派性はどちらも政党評価と党派アイデンティティという2つの異なる構成要素から成り立っていることを実証的に示す。そして、第2章と第3章では、この党派性の二重構造モデルを踏まえて、党派性研究の主要な論点である多次元性の問題と安定性の問題を再検討する。

党派性の理論においては、上記の二重構造という枠組みにもとづいて、政党評価としての側面と党派アイデンティティとしての側面のそれぞれに固有のメカニズムを明らかにする。ここでの着眼点は、政党評価が有権者と政治のなかの政党との相互作用に関わるのに対して、党派アイデンティティが有権者と社会のなかの政党との相互作用に関わるということである。第4章では、世論調査での党派性質問に対する回答表明行動を検討することで、党派性の二重構造の形成メカニズムについて明らかにすることを試みる。第5章では、熟議民主主義における合理的無知の問題を党派性との関連で取り上げて、党派性の二重構造の政策態度への規定メカニズムについて新たな知見を得る。